

平成26年度実施事業評価

事業名	米原のタウン情報誌「まいスキッ！」発刊 (平成24年度から平成26年度)		
団体名	まいばらフリーペーパー	担当課	政策推進課
背景	米原市には民間が制作する市内情報の発信ツールがなく、米原市内にある多くの魅力や資源が市民自身にも知られていない。		
事業内容	<p>米原タウン情報誌「まいスキッ！」を、3ヶ月に1回(16ページ)で発刊した。観光、名所、人物、水といった色々な分野を取り上げ、市民に感心を持ってもらえるよう発信した。また、「公共施設新聞」のページでは公共施設の利用方法を提案し、市民に公共施設を利用してもらえようPRした。</p> <p>発行月：6, 9, 12, 3月 発行部数：15,000部 配布先：米原市内全戸、近隣の協力店</p>		
協働のメリット	市が発信する“知ってほしい情報の発信”と、市民が“知りたがっている情報の発信”二つの視点を融合させることで、より効果的な情報発信を行うことができる。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・継続した取組により知名度が上がり、市民のほとんどの人がまいスキッ！を知っている。 ・「公共施設新聞」で取り上げた施設については、利用者や問い合わせが増えた。 ・広告やマップに掲載した店舗から、「お客さんが増えました」との報告があり、年間契約で広告掲載をしてくださる会社が増えた。 		
自己評価(団体)	<ul style="list-style-type: none"> ・全戸配布の効果から、多くの市民に読んでいただいております。取材先や広告の店舗への来客者や問い合わせが増えている。 ・まだまだ米原には魅力がたくさんあるため、継続して情報発信をしていきたい。 		
自己評価(行政)	<ul style="list-style-type: none"> ・まいスキッ！の認知度向上に伴い、取材先との繋がりが生まれ、当団体が企画する他の事業への連携も生まれている。 		
講評	<p>3年間という短い期間でよくここまでのものを構築された。</p> <p>全戸配布されているところが強みであり、地元の小さな店舗でも掲載いただけ、信用も得られる。企業が賑わえば地域も活性化する。まさしくまちおこしに繋がっていく情報誌である。</p> <p>まいスキッ！を読まれた方が、米原市は面白そうだ、良いまちだと思ってもらえるようなイメージを全国に広め、そうすることで米原市に一度行ってみたい、住んでみたいということになれば過疎化や高齢化の課題解決策に繋がるのではないかと。</p> <p>この取り組みは全国的な先進事例となっていると思われるため、視察などあれば是非有料で受けていただきたい。</p> <p>前回の報告会で、いつか取り上げるテーマに行き詰るのではという話を聞いたが、同じテーマでも角度や内容を変えて取り上げていただければと思う。</p> <p>市民と米原市を一緒に盛り上げていきたいという展望は非常に良い視点であり、今後も期待している。</p>		

事業名	Myばらで米原のまちづくり（平成24年度から平成26年度）		
団体名	Myばらプロジェクト	担当課	政策推進課
背景	「交通の要衝」として発展してきた米原市としての地域特性が十分生かされておらず、地域の活性化や発展性のための市民レベルのまちづくり活動が必要。		
事業内容	<p>【ばらの剪定・さし芽講習会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年6月22日（日）米原駅西口円形広場 28名の親子が参加。バラの剪定を体験し、持参のペットボトルを加工して植木鉢づくり、さし芽体験などを実施 <p>【ばらの植栽活動】</p> <p>市内の公共施設や企業などの施設内に園児や学生とともに植栽を行った。 7ヶ所実施</p> <p>【Myばら推進活動】</p> <p>①Myばらシティ展</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年10月18日（土）、19日（日） 近江公民館 ばらにちなんだ手作り作品、写真等の展示、アート作品体験講座を開催。 <p>②聖泉大学学園祭に出店</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年11月2日（日） 聖泉大学 聖泉大学人間学部の学生とともに学園祭に出店。バラの作品の紹介と普及。 <p>③Myばらコサージュづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年1月29日（木）米原小学校 卒業式に卒業生が胸に付けるコサージュを、在校生（5年生徒）が手作り。メンバーが作り方の指導。 		
協働のメリット	市民の市民参画によるまちづくりを推進するため、まちづくりは誰にでもできるというイメージ改革や、特に女性が関心を持ってもらいやすい分野の開拓、植樹やコサージュづくりなどで子どもたちが愛着の持てる取り組みを展開できる。		
成果	ばらの剪定・さし芽講習会では幅広い年齢層に参加いただくことができ、世代間交流が図れたほか、まちづくりが誰でもできるということが伝えられた。		
自己評価（団体）	一定の成果と市民の方々の理解をはじめ、まちづくりへの関心が高いことがわかった。		
自己評価（行政）	団体と行政がお互い協力し、その効果を共通理解しながら実施できた事業であった。これからはより団体が主体となって継続されることとなるが、多くの賛同者、協力者を増やせるようお手伝いをしていきたい。		
講評	地道な活動が大切である。バラづくりを通して最初は興味がある方だけでもよいが、それを地域に浸透させていくことで地域コミュニティの活性化に繋がる。友達の輪が広がっていくような取組をしていただきたい。 自己資金力を高める取組が必要であり、全国にある○○の里といったような全学的な取組となるよう市とともに本腰を入れて取り組んでいただきたい。		

事業名	伊吹の天窓（平成24年度から平成26年度）		
団体名	伊吹の天窓実行委員会	担当課	政策推進課
背景	いつまでも住み続けたい水源の里まいばらをつくるためには水源の里まいばらの魅力を伝え、米原に住みたいファンを増やし、定住につながるまちづくりを進める必要があるが、担い手や機会そのものが絶対的に不足している。		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・里おこしイベント「伊吹の天窓2014」 ・米原市の魅力や課題を伝える継続的な情報発信と収集 昨年度開設した伊吹の天窓オフィシャルウェブサイト、Facebook、Twitterを活用し、イベントの準備期間から通して伊吹の天窓の情報を発信。 地域の魅力創出に向け、市内の活動グループとともに商品開発。 ・人的ネットワークの拡大 活動を共感し一緒に動いてくれる人のネットワークの拡大。 		
協働のメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・オール米原を意識した活動展開 ・実行力をもった活動展開 ・お互いの役割を尊重し合える関係性の構築 		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・米原ファン候補の獲得と積極的な交流 台風の影響により、里おこしイベント「伊吹の天窓2014」は中止となった、昨年を上回る60名もの有志スタッフのほか、企業や大学生との連携・協力・交流をすることができた。 ・地域住民の元気づくり 多くの地元住民の参加協力が得られた。 ・キラッと輝く素材を磨いて魅力に変える働きかけ 地域団体とともに商品開発をすることができた。 		
自己評価（団体）	<p>運営精度が高まり、新たなチャレンジや新たなネットワークの開拓など、準備段階での一体感や盛り上がりはとても良かった。</p> <p>解決しようとする課題は短期間で達成できるものではないが、少なくとも課題可決のきっかけにはなりつつあると思う。「何をすれば面白そうか」「何をすれば喜んでくれそうか」という思考を大切にしてくれる人が増えたように感じる。</p>		
自己評価（行政）	<p>里おこしイベントは荒天のため中止となったが、それまでのプロセスや伊吹の天窓ブランドの形成などお互いの発展に繋がったほか、共感する協力者も増え、人的ネットワークの拡大に繋がった。</p> <p>継続した取組の結果、伊吹の天窓という名称が市内に知れ渡ったほか、地域をより良くしていきたいという輪が広がればと期待する。</p>		
講評	<p>里おこしの思いを形にするというコンセプトで根付きつつある。昨年は残念であったが、結果を見てしっかりと軌道修正を行い、新しい展望を見据えられているところが団体と行政が協働した効果かと感じられる。</p> <p>奥伊吹の魅力をアピールする素晴らしいイベントであったため、中止はとても残念であった。中止で終了ということなく、その人材やノウハウを他の地域でも生かしていただきたいと期待している。雪ふみダンスがなくならないよう頑張っていたきたい。</p>		

事業名	地域で子どもを育てる“冒険遊び場”（平成25年度から継続中）		
団体名	上丹生プロジェクトK	担当課	子育て支援課
背景	群れて遊ぶ場、多くの大人に見守られて育まれる暮らしの場が不足している。親世代は、核家族化が当たり前になるなかで、孤独になり、子育ての自信を失っている。		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月第4土曜日、日曜日に冒険遊び場を開催 ・年間3回の特別企画の開催 ・遊び場の普及活動として宇賀野でもスタート ・啓発活動の一環として市子連の総会や他地域との交流会を開催 ・メンバーの研修を兼ねて先進地域を訪問 ・遊び場を始めようとする方を支援 		
協働のメリット	事業への信頼感が得られ、広報、周知活動が広くできる。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・定期開催日を増やしたことによって参加者やリピーターが増加した ・特別企画の開催により、多くの方に周知が図れた ・宇賀野冒険遊び場との連携で参加者増加に繋がった ・場所や資材などの協力者も増え、地域での周知が高まった ・定期開催日以外でも遊びにくる子どもが増えた ・他地域との交流会で冒険遊び場に興味を示される方も現れた 		
自己評価（団体）	<p>認知度も高まり、参加者の増加や開催日以外でも自由に遊ぶ子どもが増えてきた。地域の大人の方と参加者との交流の機会でもあったが、まだまだ少ないのが現状で、今後企画など通して交流の機会を増やす工夫が必要である。</p> <p>立ち上げ時に資金面や広報面で支援いただけたことは大きかった。継続した取組になるよう、自主財源について考えており、目途が立ちそうである。</p> <p>冒険遊び場に関心を持つ方が増えたことは効果があったと思う。</p>		
自己評価（行政）	<p>協働している団体は地域との関わりが深い。市内外でのネットワークも広がっており、事業を進める上で更なる発展に期待できる。</p> <p>市民への認知度が高まっており、事業の周知については定期的に周知できるよう検討したい。</p>		
講評	<p>米原市は子育てしやすいまちであると掲げているため、自己評価シートに書かれているように、冒険遊び場の要素を幼稚園や保育園に生かせないかということ、この制度の成果として考えていただきたい。子育て支援制度が新たに変わった今がチャンスである。</p> <p>ぜひ他の地域に広めていただきたい。地域の子どもだけでなく、滋賀県中から体験しにくるような場にしていきたいが、大変なことであるため、応援隊を募ることも検討いただきたい。子どもたちに川遊びをさせてほしい。</p> <p>この事業は単独部署だけでなく、教育と子育てといったように複数部署で連携し、チームワークで推進していただきたい。</p>		

事業名	米原まちづくりネットワークの構築（平成25年度から継続中）		
団体名	ルッチまちづくりネット	担当課	政策推進課
背景	まちづくり団体への新たな参加者が少なく、活動の継続性、発展性に課題を持つ団体が多い中、活動の活性化に不可欠な活動団体間の直接の交流機会が少ない状態である。		
事業内容	<p>■『…』のまどカフェ開催 8回開催。</p> <p>■まちづくり人材ノ森集会2015の開催 開催日：3/1（日） 場所：近江公民館多目的ホール 参加者：約70名 ①基調講演：「TSUGI」「福井新聞社」「FUKUI FOOD CARAVAN」の取組 ②ワークショップ：居合わせから仕合わせへの仕組みづくり＝米原編＝</p> <p>■ルッチ大学との連携 ルッチ大学卒業生であるルッチまちづくりネットがルッチ大学の企画や運営のサポート。</p>		
協働のメリット	市の情報や、他の団体の事業の情報を得られる。同じ課題意識と目的を持って事業を進めることで、効果的な事業内容が推進できる。		
成果	<p>『…』のまどカフェについては、参加しやすい雰囲気を作り出し、まずは参加してみるという行動を促せた。</p> <p>まちづくり人材ノ森集会ではゲストスピーカーからの基調講演のあと、ゲスト、大学生、参加者を交えてワークショップを行い、参加者同士の輪が広まった。</p> <p>ルッチ大学での連携については卒業生が現役生を地域に連れ出し、現役生が卒業生の実施する事業のサポートという関係が生まれた。</p>		
自己評価（団体）	<p>本事業で開催したイベントに参加いただいた方々が、以前より積極的に関わってもらえたという実感が得られた。今後、まちづくりに参画してもらえそうな人に多く参加いただけた。</p> <p>協働事業報告会をコミュニティカフェ形式で行うことで、事業団体同士の交流を深め、市民に協働事業の仕組みをPRする機会となった。</p> <p>人材ノ森集会では参加者から積極的なアクションが見られ、有意義な意見交換ができた。</p>		
自己評価（行政）	<p>ルッチまちづくりネットが持つ人的ネットワークが十分発揮できた。その繋がりが市にもできたことは今後のまちづくりにとっても大きな財産である。</p> <p>団体間同士の繋がりのほか、協働提案事業実施者間の連携も深まりつつある。</p> <p>人材ノ森集会では、まちづくりに積極的に関わろうとする意欲的な参加者のほか、大学との連携による学生のフィールドワークの場にもなった。当団体との事業は協働の推進の見本となっていると感じる。</p>		
講評	<p>人と人を繋ぐネットワークの活性化を民間でされているのは素晴らしいことである。のまどカフェなどの貴重な内容をもっと発信いただきたい。</p> <p>定期的実施されている場所に行き交流を図るというのも1つの手法だが、急に思い立ったときに相談できる窓口も必要である。</p> <p>のまどカフェは熱心に開催されている。地道な活動であり、他への刺激になるのではないかと。今後とも様々な場所で実施いただきたい。</p>		

事業名	柏原地区古民家活用サポーターズ（平成26年度から継続中）		
団体名	未来へつなぐ古民家活用サポーターズ	担当課	山東自治振興課
背景	<p>柏原地区はJR柏原駅から徒歩圏内であるにもかかわらず、住居や店舗、施設として活用されずに空き家となった古民家が目立つ。空き家は景観、防犯、また安全上の問題や地域の活気が失われる要因の一つとなっており、地域住民からも何らかの活用策を望む声が高まっている。</p>		
事業内容	<p>柏原の古民家をコミュニティスペースとして活用し、地域の活性化に繋がる事業を展開する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飲食事業（カフェ、ワンデーシェフ、地域交流会） ・宿泊事業（子どもたちの体験民泊、修学旅行生受入れ、農業体験等） ・貸館（イベント開催、アートツアー、上映会、写真コンテスト、コミ活ミーティング、コンサートライブ、演奏会等） 		
協働のメリット	<p>行政が直接タッチしづらい個人資産である古民家を公共的に活用することができる。市との協働することで信用を得やすく、事業を円滑に進めることができる。</p> <p>団体には専門性を持った人材があるほか、行政単独に比べ、スピード感を持って事業を進めることができる。</p>		
成果	<p>新しくコミュニティスペースを生み出したことにより、地域の方だけでなく、他府県からも柏原に来ていただくことができ、地域の活性化に貢献できた。</p> <p>団体の認知度が高まった。</p>		
自己評価（団体）	<p>マスコミに取り上げていただけた。</p> <p>今後、事業として発展させるために、事業への肉付けと新たなアイデアが必要と考える。</p>		
自己評価（行政）	<p>駅周辺の活性化や定住促進にも大いに効果が発揮できると期待できる。</p> <p>団体が作成する『こみんかにきてみんか新聞』やフェイスブック等により、団体の知名度は浸透しているが、継続した事業を展開できるような取組が必要である。</p>		
講評	<p>柏原だけに特化されないよう、米原市全域に広がる取り組みをお願いしたい。</p> <p>初年度ということもあり行政との関わりが少ないように思われる。行政は古民家の活用について広めていく必要があり、積極的な古民家の活用を進めるため、事例などを示してもらいたい。</p> <p>都会から移り住む人が古民家を利用してもらえるような仕掛けが必要である。</p>		

事業名	東西東西プロジェクト（平成26年度から継続中）		
団体名	はびろネット	担当課	山東自治振興課
背景	<p>柏原地域は少子化・高齢化が進み、活力に乏しい地域となっている。この地は古くは東山道、中山道が通る交通の要衝として栄え、東西文化の分岐点であった。</p>		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・全5回の「境目の歴史文化」連続講座を開講 ・JR東海ウォーキング参加者に、ウォーキングコースのガイドパンフレットを提供したほか、おもてなし交流を実施 ・歴史文化ガイドブックの作成 ・ホームページの開設と情報発信 		
協働のメリット	<p>県境を越えた自治体間の連携や、住民同士の交流促進に繋がる。</p>		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・連続講座を実施することで、東西文化の分岐点である「境目は面白い」ということを受講者とともに再認識、再評価することができた。 ・関ヶ原町の行政、住民、住民団体をはじめとする多くの方々と交流することができ、県境を越えた繋がりや人脈を確保することができた。 		
自己評価（団体）	<p>連続講座には遠方からの参加もあり、歴史ファンの関心の高さを実感した。改めて東西文化の分岐点であると実感した。ただし、市民の参加割合や若い世代の参加が低かったことは課題であり、地元の方々がふるさとを再認識、再評価できるよう努めたい。</p>		
自己評価（行政）	<p>連携している部署の特性を生かすことで、さらなる事業の発展に繋がる。また、連続講座では近隣の市町だけでなく、遠方からの参加者もあり、良い機会になった。事業を継続することで地域の活性化に繋がると感じた。</p>		
講評	<p>柏原と今須は昔から交流のあった地域。これを見直して再活性化する素晴らしいアイデアであり取組内容も良いものであった。次年度の取り組みも期待している。今後は柏原と今須という点と点だけでなく、歴史上の人物や宿場町といった繋がりや面としての広がりを作っていただきたい。</p> <p>自己資金の確保に向けた検討をいただきたい。</p> <p>企画の中にある『境目検定』は面白そうだと思っている。子どもたちを対象とするなら、ゲーム的要素があればよいだろう。また、境目検定は自己資金確保策に繋がるのではないか。</p> <p>県境を越えた取組であるため、行政の支援をお願いしたい。</p>		

審査委員総評

今回は3年間実施され、最終年度となった団体と新規に事業をされた団体があった。3年間実施した事業においては、ある一定の協働の成果やこれからの展望が見えてきた。新規事業に関しては、まだお互いの動きが見えていない感じはしたが、今回の報告の中から次の展開が見え、発展性が感じられた。

協働提案事業には事業の大小は関係ない。アイデアレベルに近くとも提案いただくことでこの制度が活かされてくる。ただ、米原市を良くしていくためには政策に反映されるような視点も必要である。

事業においては、複数の部局に関わる事業がある。そういう連携をすることで団体のパワーアップ、行政の協働に対する関わり方に繋がっていくと感じる。

米原市の取り組みは全国に誇れるような先進的な事例になる。協働の推進において3つの視点が重要になってくる。1つめは情報。民間がもつ情報、生活から発する情報といった民が持つ情報を発信して共有し、高めていくことが米原市の発展に繋がっていく。2つめは共感。賛同や参加することで共感の輪を広げることが更なる発展に繋がる。3つめは成長と協働。協働の概念は今後もなくなることはないだろう。ただ、段階を踏んで協働の形を変えていかなければならない。協働の在り方、米原市らしさを作り上げていく上で、どういう協働の団体が必要なのかということを考えて作り上げていくことが大切である。